

「公共的靈性と地球的平和ー新しい平和運動の構築に向けて」

2005-8-21

小林正弥

① 問題意識 平和運動の再生のために

(1) 世代間討論会 闘争的デモ/ピース・ウォーク、ピース・パレード
エコロジー、福祉

(2) 平和運動の再生に向けて マルクス主義的平和運動
マルクス主義の思想的問題点

1. 史的唯物論、観念論批判 文化・精神性の軽視
2. 自己論、人間論の弱体性
3. 運動論・組織論・国家論 個人の抑圧、組織や上部の命令との相克。
4. 労働価値説 個人の創造性や努力の生み出す価値の軽視
5. 階級闘争・暴力革命論 プロレタリアート独裁
最悪例：新左翼の内ゲバ事件 平和運動への否定的イメージ（暗い、危険等々）
6. (唯物論的)全体主義 全体論との相違。情報統制、テロ
7. 個人崇拜、無謬性の神話 スターリニズム、コミンテルンの神話

反共主義のように共産主義を全面否定するのではなく、それが有意義な面を持っているだけにその問題点を直視して思想的再構成を図る必要。唯物論批判だけではなく、運動論などの総体に及ぶ再構成の必要性。

靈性に ヘーゲル(精神 der Geist)への遡及、初期社会主義(ユートピア社会主義)再評価

② 靈的・公共民的人文主義：フィロソフィア第1回の紹介

(1) 近代と超近代

左翼思想の衰退 「物質主義 脱物質主義(イングルハート)」に対応
他方、感性・靈性への注目

現代思想(唯物論的・虚無主義的ーポスト・モダン思想)の誤謬
超近代の思想の必要性

ただし、注意点 近代的達成の軽視

悪性カルトの罖 ex. オウム真理教事件
精神世界 新精神世界

原理主義的宗教の危険性
キリスト教・イスラーム・ユダヤ教・ヒンドゥーなど
「反テロ」世界戦争

理性の軽視 理性・感性・靈性の統合の必要性
自由・個人(個性)の抑圧 自由学芸の重要性
超近代に際して、近代を踏まえた超近代である必要性

(2) 21世紀の新人文主義

アメリカ・ブッシュ政権 原理主義
ヨハネ・パウロ2世 カトリック
復活祭(3月27日) フィレンチェ ウフィツィ美術館
(公共民的人文主義) ルネッサンスの思想的復活(!)
翌日、ローマ、バチカン。ヨハネ・パウロ2世最後の式典の余香と、バチカン博物館やシステーナ礼拝堂におけるキリスト教的ルネッサンス(宗教+ルネッサンス 霊的ルネッサンスの原型)

ギリシャ哲学 ルネッサンスは上記4点の問題点を克服する
霊性の復興に際して、近代の人文主義の精神を「復活」させる
学芸(学問・芸術)の改革と新時代における復興・再生
西洋 学問・芸術の発祥 = ギリシャ / 宗教 = キリスト教、
中世(霊性の時代ではあるが、硬直的宗教の弊害)
近代におけるルネッサンス(人文主義)とプロテスタンティズム
(宗教改革)
21世紀における学芸改革(学問・芸術改革) = 新人文主義
人文主義にも拘らず、その後に唯物論的な「現代思想」に転落
近代における人間性の開花を踏まえた、霊性の復興
真の人間性 = 霊的人間性(spiritual humanity)の開花 = 魂の開花、積極
的人生観・世界観(ポジティブ)
(近代ルネッサンスはその後キリスト教との結びつきを欠いて、単なる人間中心主義(世俗的人間主義)に転落したが、その意義は宗教的硬直性から霊的人間性 = 神的人間性を開放したところにある)
さらに、プラトンが目指したように、
新しい時代に即した理想公共世界 = 友愛世界の実現を目指す。
近代のルネッサンスにおける公民的人文主義
新公民的人文主義 = 公共民的人文主義
霊的人文主義(spiritual humanism)に立脚した公共民的人文主義
(civic humanism)を = 霊的・公共民的人文主義

地球的平和を可能にするために、学問改革と新学芸(学問・文芸)復興の理念に立脚し、万人哲人主義に基づき、公共民が愛智の学を学習し研究することを可能にする研究・教育プログラム。これによって、アクションを行う公共民を育成し、平和な「もう1つの世界 = 友愛公共世界」の形成を促進する。

今年、「ゼミ：プラトンの文献+ 、講義、総合討論+実践的相談」

3 スピリチュアリティの概念

(1) 日本的霊性(鈴木大拙)とその批判(鎌田東二) 資料1

鈴木「霊性」 精神性と物質性との二元的対立を超えた「霊性」

禅、浄土系思想 禅的把握

神道への浅い理解(鎌田) 神道にも霊性は存在

(2) 霊性概念の整理(中村雅彦)

Elkins et al. (1988)「ラテン語で Spiritus(いのちの息吹き)を意味するスピリチュアリティとは、超越的な次元への自覚を通じて生じ、自己、他者、自然、人生、そして究極のものとして考えられるあらゆる事に関して同定可能な価値によって特徴

づけられる存在と経験の様態である」

超越的な次元、 人生の意味と目的、 人生における使命、 生の神聖さ、
物質的な価値（に究極的な価値を認めない）、 愛他主義者、 理想主義、 悲
劇性への気づき、 霊性の結実

WHO（世界保健機構） 憲章前文改訂案

健康「完全な肉体的、精神的（mental）、霊的（spiritual）及び社会的福祉の動的な状態
であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」

西平（2003）スピリチュアリティと霊性とのずれ ルビ

宗教性・・・宗教組織に依存しない意味での宗教的意識、宗教的情操、
全人格性・・・身体、こころ、社会などをふくんだひとまとまりとしての個人全体、
実存性・・・感動をもって理解される、魂にふれるような主体的、主観的な自覚、
大いなる受動性・・・何か聖なるものにふれ、「生かされている」と実感すること、

スピリチュアリティの暫定的な用語法（西平，2003 をもとに作成）
スピリチュアリティ＝霊性
スピリチュアリティ＝宗教性、宗教的情操、宗教的感受性
スピリチュアリティ＝精神性、芸術的感性、身体的感性
スピリチュアリティ＝見えざるものへの感受性
スピリチュアリティ＝超越性、神秘性、垂直性、超自然性
スピリチュアリティ＝実存性
スピリチュアリティ＝内面性、内面への道、沈黙・瞑想、自己否定性
スピリチュアリティ＝全人格性
スピリチュアリティ＝求道性
スピリチュアリティ＝聖なるものとのつながり
スピリチュアリティ＝大いなる受動性、脱自性
スピリチュアリティ＝魂に関わる事柄
スピリチュアリティ＝いのちとのつながり、いのちの発現
スピリチュアリティ＝気の流れ、風の流れ
スピリチュアリティ＝いかなる訳語も適当でない場合、上記のすべてを含む

以上は、中村（文献4）による。中村は、さらに人々の用法や受け止め方を調査。
西洋的 / 東洋的・日本的

（3）哲学と霊性

霊性は内面的な精神性と近い概念。しかし、単なる内面的精神性だけではなく、
超越的・形而上学的実在（仏教的空も含む）の存在を含意する。

大霊（Great Spirit）＝神＝Geist（ヘーゲル）

霊の偏在 汎神論的・アニミズム的観念 宇宙的進化

従って、ヘーゲル哲学のような宇宙論的・形而上学的世界観

ただし、日本語では「幽霊」のような否定的で怪しげな含意にも通底する。

ここで重要なのは、哲学的・形而上学的論理の存在

法則（自然法・仏教的な法・宇宙法則）が説明されている場合には、個々の靈的現象に煩わされずに倫理的な美徳ある生活をするにより靈的成長や幸福がもたらされることになる。 Cf. プラトンの神話批判

（４）宗教と靈性

靈性は宗教性と近い概念。しかし、特定の組織宗教に捕らわれずに普遍的な立場を取ることができる。 宗教的多元主義（ヒック）

普遍志向性、超宗教性・通宗教性、開放性（閉鎖性や偏向の打破）

精神性のさらに深い次元、深層的自己への注視と関心と洞察

靈性の３要素 全体性・根源性・深化

（鎌田）

（５）宗教学的観点

原始宗教 民族宗教 世界宗教

幕末明治以来の新興宗教が新宗教という呼称に

黒住教・金光教・天理教・大本教・靈友会・生長の家・創価学会・立正佼成会

新新宗教 1970年頃から

精神世界（日本）、ニュー・エイジ運動（アメリカなど）

ニュー・エイジ周辺を入れるために。

= 新靈性運動（new spiritual movements、島園進）

グローバル、相互影響的・同時多発的

「個々人の『自己変容』や『靈性の覚醒』を目指すとともに、それが伝統的な文明やそれを支える宗教、あるいは近代科学と西洋文明を超える、新しい人類の意識段階を形成し、靈性を尊ぶ新しい人類の文明に貢献すると考える運動群である。」（51頁）

- ・ 伝統的宗教と異なり、固定的な教義や教団組織や権威的な指導体系、あるいは「救い」の観念といったものをもたず、個々人の自発的な探究や実践に任せる傾向

- ・ 信仰と科学とを対立的に捉えない。科学と靈性との深化・一致

学歴に恵まれた層

ネットワークの重視、伝統的宗教批判・超宗教への志向性

（島園、文献5、51）

（６）暫定的定義

超越的・形而上学的実在に基づく（その存在を含意する）世界の特性ないし人間の精神性・宗教性。

伝統的宗教にも存在。ただ、新靈性運動が主張するように、特定宗教を超えた普遍性を持つという点で超宗教的。

さらに、形而上学的・宇宙的論理としての法則性を重視・導入したいところ。

4] スピリチュアリティと平和

（１）宗教と平和

しばしば宗教戦争の例 宗教否定論

実際には、その共同体の内部では、平和を説いているものが殆ど。

生命の尊厳 平和の必要性 日本...和、ユダヤ教...シャローム等々
ホピ 平和の人々
問題は、共同体間・宗教間の紛争 ジハード（イスラーム）
「撃ちてしまむ」（記紀）
多くの宗教に多かれ少なかれ双方の側面が存在 特に民族宗教の段階
信念が強固なほど悲惨な戦争に 克服の課題
普遍的世界宗教には克服の方向性 キリスト教 博愛
仏教 宗教戦争少ない

(2) 内面的平和と外面的平和

外 内 例えば、マルクス主義のように外面的平和のみ 闘争的、疲弊、人間関係の
軋轢、個々人の魂の欲求と組織や運動との摩擦などの問題 内
面的平和 = 平安へ

内 外 例えば、瞑想・波動重視などで、抗議行動否定など内面的平和のみ
個々人の成長や平安にはよくても、外的世界への影響は不十分
外面的平和を追求

双方の好循環を形成する必要

内面的成長により、徳を身につけ、より有効で影響力の大きい質の高い運
動を形成。

外面的運動の過程で起こってくる様々な問題に対して、内面的省察を行う
ことによって克服するという精神的姿勢 内面的成長に

外的運動自体が精神的成長（修行）の場という発想

総合的平和の方法論

一般的問題 丸山眞男 ラディカルな精神的貴族主義と民主主義の結合
トーマス・マンがマルクスを読む
竹内整一 『「おのずから」と「みずから」』（春秋社、2004年）
自然的作為

5 公共的靈性の概念

(1) 理性・感性・靈性

自由や理性の必要性 理性と感性の統合。靈性はその双方の基盤。
靈的理性（靈智） 靈的感性

(2) 市民宗教と公共宗教

宗教 近代化と共に衰退、社会が世俗化し宗教は私事化して公共的な現象ではなくな
るというリベラル説

公共的機能の復活

市民宗教（ベラー） 政治の根底にある宗教的次元 アメリカ大統領就任演説

ベラー自身はアメリカの原点の回復を志向、「破られた契約」

プロテスタンティズム的・共和主義的個人主義（『心の習慣』）

WASP的

その後、多文化的状況により無理という批判。さらには、キリスト教原理主義の台頭
により、それを市民宗教と呼ぶ用法やそれに基づく市民宗教批判。

「国教」「国体」の正統化？

ルソーの原義 人間の宗教・公民の宗教・僧侶の宗教
市民宗教...純粋な市民の信仰。最低限の共通宗教。
この内、国教 = 公民の宗教、市民宗教はそれとは異なる。多くの「市民宗教 = 国教」という批判は誤解。
さらに、『エミール』では、自然宗教論が存在

公共宗教 (public religion) ジョン・ウィルソン
公共神学 リネル・ケディ
多元的状况における公共宗教、それを促進する公共神学
公共的議論への参加
公共宗教 ホセ・カサノヴァ 宗教の脱私事化 = 公共的次元
国家 国教、チャーチ、公認宗教
政治社会 政治的活動をする公共宗教
市民社会 単一の人類の市民社会における公共善を目指す批判的・公共的
討論の促進

結論としては問題ないが、概念的に未整理な印象。
「公的宗教 = 公定宗教 = 国教」と混同される恐れ。さらに「宗教」という概念は、
組織宗教・特定宗教を連想しやすいという難点。
「公共的」の意味 + 「靈性」(ルソーの自然宗教に相当)

(3) 公共的靈性

公共的...公共哲学における「公的 / 公共的」という相違を重視。
公共的 公と私を媒介する公共。人々が下から水平的に形成する public
公的宗教・靈性 / 公共的宗教・靈性 / 私的宗教性・靈性
さらに、この「公共」は様々なコミュニティにおける公共性。
言い換えれば、国民的だけではなく、地球域的(グローバル)で、地域や
結社・運動体の水準における公共的宗教・靈性が存在。
靈性...コミュニティの種類によっては特定宗教の場合もあり得るが、大きなコミュニティや結社の場合には、その中で共有される超宗派の靈性。

例：

平和問題...平和のための祈り 超宗派の公共的靈性
靖国問題...国立追悼施設 超宗派の追悼施設 = 公共的靈性の施設

6 似非「靈性」の危険性

(1) 4つの罨 原理主義的・公的・全体主義的・呪術的「靈性」
(宗教)社会学的視点 その依拠するもとの宗教の善悪や質にかかわらず、その
組織・運用や硬直性・形骸化などの社会学的特質に基づいて生じる問題
中立的・客観的分析の必要性
新靈性運動 内実は玉石混淆 識別の必要性 これによる公共的靈性
(私的靈性)

利己主義的呪術

呪術 靈的な方法による利己主義的目的の実現、原始時代からの靈性
典型：黒魔術

ここでの基準

1. 霊的成長：本当に個々人の霊的・倫理的成長に役立っているか。
2. 公共善：思想・教えが組織以外の人々に対して貢献する利他性・公共性を持っているか。」

国家宗教 = 公宗教 = 公的「霊性」 国家神道や靖国問題

古代以来 もとものの民族宗教は歴史的には正当、必然的。しかし、今日にあっては、排他的民族宗教は権力と結びついて危険。

原始神道、地球・宇宙神道

トランス・ナショナル、多層的なエイデンティティーの必要性

新国家主義が若者を惹きつける一因 擬似的宗教性としての純粹さ
= 国家を神とする「偶像崇拜」 真正の霊性へと導くことが必要

権力と霊性

古代宗教 政治権力を正統化

枢軸の時代の世界宗教 2元論的 権力に屈せず霊的な権威を確立

近代革命の思想的源流に

それにもかかわらず、権力と癒着したり妥協したりする「霊的」権力も存在

宗教的原理主義 (fundamentalism) = 原理主義的「霊性」

キリスト教・イスラームなどの世界宗教にも存在。

聖典を無謬と信じ、字義通り実現しようとする 時代錯誤。反動的、
硬直的。 リベラルな解釈学的姿勢の必要性。

「反テロ」世界戦争の原因 キリスト教・イスラーム・ユダヤ教原理主義が
いずれもそれぞれの地域の国家主義と結びついたこと。

もともとの世界宗教は正当、しかしその時代錯誤的硬直性のために問題
理性・知的柔軟性の必要性

(悪性)カルト = 全体主義的宗教・「霊性」

最近の新々宗教、霊的運動の問題

宗教自体が信者にとって「公」となる

フレンチ・ダヴィディアン、人民寺院、統一教会、オウム真理教など

フランスは厳しいので、創価学会までもカルト視

日本では、オウム真理教事件の衝撃 精神世界 新精神世界となる必要性

カルト 「何らかの強固な信念(思想)を共有し、その信念に基づいた行動を熱
狂的に実践するように組織化された集団」

cult の原義 儀礼、崇拜、熱狂 これ自体は宗教の特性だから、これだけ
なら問題にはならない 社会学的な組織・運営などに問題

破壊的カルト = 非倫理的なマインド・コントロールのテクニックを悪用して、
そのメンバーの諸権利を犯し傷つけるグループ (スティーヴン・ハッサン、
75頁)

マインド・コントロール

行動コントロール 命令、許可、報告

思想コントロール 特殊な詰め込み言語、思考停止
感情コントロール 罪責感・恐怖、忠誠・献身
情報コントロール 外部の情報や人間関係と遮断
解凍・変革（受け入れることだけを語り、「靈的体験」を誘発）・再凍結
睡眠不足・プライバシー欠如・食生活の変化などにより型にはめて、
二重人格（ロボットのような話し方をするカルトの [人名]）

カルト心理

教義こそ現実、現実世界は善悪の二者択一、自分達を特殊視するエリート心理、集団や上位者への絶対服従（個性は悪）リーダーをモデルにする厳格な服従、よい業績による幸福（本物の友情は好ましくなく、リーダーへの忠誠、表面的人間関係）恐れと罪責感による操作、情緒の高ぶりと落ち込み、切迫した時間感覚、辞める正当な理由という出口無し

カルト評価

リーダーシップ（経歴・生活・権力集中）教義（内部向け教義・外部向け教義の使い分け）メンバーシップ（ごまかしや嘘の勧誘、家族や友人との接触断絶によるメンバーシップの維持）辞める正当な理由がない

以上、ハッサン

靈的全体主義 魂への束縛、教祖や組織を絶対視しやすいだけに通常の組織より強烈な束縛。 戦前の軍国主義化した日本も同様。
日本ファシズム 国家神道の宗教的全体主義（権威主義）

思想的・社会的意義により、

「良性カルト」 思想的には有意義なので、良性腫瘍のようなもの。害は少ないが、組織は好ましくはない。

「悪性カルト」 思想的にも、組織においても有害、犯罪的ないし危険な悪性腫瘍。

当初は健全なグループでも、組織維持・拡大が自己目的化したり教祖崇拜が昂進したりしてカルト化することがあるので、その点に注意が必要。悪性カルトは当初から思想に問題がある場合が多いと思われるが、良性カルトにはこのような変質例が多く含まれる。

カルト / 非カルトの基準

1. 靈的成長：本当に個々人の靈的・倫理的成長に役立っているか。
2. 公共善：思想・教えが組織以外の人々に対して貢献する利他性・公共性を持っているか。」

他方、脱カルト・反カルト運動の問題点 宗教学ではこの運動に批判的な研究者が少なくない（カルト理論にも慎重）

なぜなら、宗教性・靈性自体に懐疑的で不信感を持っている人やグループがあり、全ての宗教的・靈的運動を「カルト」と即断して批判するから。

宗教性・靈性に理解のある観点からの悪性カルト批判が重要
カルトの経験を生かして、有意義な靈性に。

自由、思考・理性の必要性

この内、 と はマルクス主義の問題点と類似。

逆に言えば、これらの問題点を回避すれば、有意義な靈性

ネットワーク型の緩やかな結合

これらの畏を避けることによって、公共的に認められる霊性としての公共的霊性を確立する必要性 監視機関やアドバイス・グループなどのネットワークも必要

7) スピリチュアル・アート・オブ・ピース (霊的平和術)

(1) 平和術 感性 音楽・祭り・舞踏など

(2) 霊的平和術 歩く瞑想による、ピース・ウォーク
平和への祈り

参考文献：

1. 鈴木大拙『日本的霊性』(岩波文庫)
2. 鎌田東二『神道のスピリチュアリティ』(作品社)
3. 同『神と仏の精神史再考』(祖国寺教化部活動委員会)
4. 中村雅彦「スピリチュアリティ(霊性)概念の再検討 市井の人々が語る日本的なスピリチュアリティの定量的・定性的分析のパラダイム」

<http://homepage3.nifty.com/yahoyorodu/rsts.htm>

5. 島藺進『精神世界のゆくえー現代世界と新霊性運動』(東京堂出版)
6. 同『現代救済宗教論』(青弓社)
7. 津城寛文『公共宗教の光と影』(春秋社)
8. ホセ・カサノヴァ『近代世界の公共宗教』(玉川大学出版部)
9. 稲垣久和『宗教と公共哲学 生活世界のスピリチュアリティ』(公共哲学叢書6, 東京大学出版会)
10. スティーヴン・ハッサン『マインド・コントロールの恐怖』(恒友出版)
11. J・C・ロス『カルト教団からわが子を守る法』(朝日新聞社)
12. 西田公昭『マインド・コントロールとは何か』(紀伊国屋書店)
13. 櫻井義秀「カルト論の現代的射程」『現代社会学研究』17, 1 - 19.

<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~n16260/pdf2004/gendacultperspective040916.pdf>

14. 脱カルト関係のHP

<http://homepage3.nifty.com/yahoyorodu/rsts.htm>

<http://www.geocities.jp/recoverycult2005/> カルトに傷ついたあなたへ

とても有益。基本的知識。霊性を否定するのではなく、霊性を肯定する立場からのサイトなので優れている。脱カルト後に信仰によって救われた人。ここから下に貼り付け。

<http://www.geocities.jp/cultseminar/> カルト・セミナー

<http://www.geocities.jp/cultseminar/whatscult.htm> この重要な部分を下に貼り付け

<http://www.sapphire-ark.com/> サファイアのミントゾーン

<http://www.sapphire-ark.com/datsu.html> この脱カルトの際の症状

<http://www.cnet-sc.ne.jp/jdcc/> 日本脱カルト協会 この集団健康度チェック

<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Library/1847/ml.html>

<http://www.just.or.jp/modules/xfsection/index.php?category=4> この二つは、
脱カルト症状に苦しむ人のためのML
<http://www7.ocn.ne.jp/~elfindog/culchek.htm> カルト危険度チェック

<http://jfrf.forf.org/101.html> カルト警戒 具体性は少ないが、良心的サイト

カルトの特徴

<http://www.geocities.jp/recoverycult2005/teigi.html>

カルトがどのような方法で人を縛り上げていくのか、以下の一覧で確認していきましょう。

1. あなたをカルト以外の他の人たちから引き離し、環境を操作します。
2. カルト以外の他の人たちと話したり、カルト以外からの情報が入らないようにします。
3. 不十分な食事やカルト内での過剰な活動によって、あなたを衰弱させます。
4. 精神的に萎縮させたり、自尊心を砕かせたりします。
5. 不安、恐怖、混乱をかきたて、あなたがカルトへ服従することによってのみ、喜びや確信が与えられるようにします。
6. 訓練の中で誉めたりけなしたりというように、飴と鞭を巧妙に使い分けます。
7. 儀式化された集会で仲間からの糾弾、問い詰めなどの圧力を与え、あなたに罪悪感を起こさせたり、人前で懺悔するように仕向けます。
8. リーダーはあなたやカルト全体を支配しているように見せかけ、あなたが心身ともにカルトに服従することで運命が決まると主張します。
9. 祈祷や印刷物の書き移しなど、単調な作業や同じことを繰り返す活動に従事させます。
10. 自分自身、家族、以前の価値観に決別するよう仕向け、それまでの生き方を否定します。

これらがすべて当てはまるカルトもあれば、部分的に当てはまるものもあります。しかし、大半に心当たりがあるのでしたら、カルトである可能性は十分でしょう。

宗教とカルトの違い(上記サイトより)

<http://www.geocities.jp/recoverycult2005/shukyotocult.html>

ここでは、「宗教もカルトも同じようなものだ」という極論から冷静に身を引いて考えるために、カルトではない宗教とカルトとの違いを示します。

- ◆宗教は個人の自立を尊重する。
- ◆カルトは服従を強いる。

- ◆宗教は個々人を助け、その人の信仰的な求めを充たそうとする。
- ◆カルトは信仰的な求めを搾取する。

- ◆宗教は問いや自立した批判的な考え方を許し、また奨励もする。

- ◆カルトは問いや自立した批判的な思考をさせない。
- ◆宗教は心理上のものと信仰上のことを統合する。
- ◆カルトは信者を「カルトの中でのよい自分」と「過去の悪い自分」に分裂させる。
- ◆宗教の改宗は一個人のアイデンティティに関わる内的プロセスの展開を伴う。
- ◆カルトの改宗は、一個人のアイデンティティに顧慮することない外的力に、知らないうちに投降してしまう。
- ◆宗教は金銭を倫理的抑制に従いつつ、崇高な目的を果たすための手段の1つとしてみなす。
- ◆カルトは金銭を、目的として、また権力を手に入れ、リーダーたちの利己的な目的を果たすための手段としてみなす。
- ◆宗教は、信者と宗教家とのセックスは非倫理的であると見なす。
- ◆カルトはしばしば、信者をリーダーたちの性的欲求のはけ口とする。
- ◆宗教は批判する人に丁寧に応答する。
- ◆カルトはしばしば、物理的あるいは法的脅迫で批判する人々を脅す。
- ◆宗教は家族、家庭を大切にする。
- ◆カルトは家族、家庭を敵と見なす。
- ◆宗教はある人が入信しようとする時には、よく考えてから決断するよう勧める。
- ◆カルトはほとんど情報を与えないまま、即断するように求める。

<http://www.geocities.jp/cultseminar/whatscult.htm>

カルトの見分け方

- 1 . 真理はその組織に占有されており、その組織を通してのみ知ることができると主張する。
- 2 . 組織を通して与えられた情報や考え方に対しては、疑ってはならない
- 3 . 自分の頭で考えることをしないように指導する
- 4 . 世界を組織と外部とに二分する世界観を持つ
- 5 . 白黒を常にはっきりさせる傾向が強い
- 6 . 外部情報に対して強い警戒感を与え、信者の情報経路に様々な制限を加える
- 7 . 信者に対して偏った情報、偽りの情報を提供することがしばしばある
- 8 . 組織から離脱した人間からの情報に接することを禁じる
- 9 . 家庭や社会との関わりで多くのトラブルを生じている
- 10 . 社会からの迫害意識を持ち、それをかえってバネにする
- 11 . 外部に対して正体を隠す傾向がある
- 12 . 生活が細部にわたって規定される
- 13 . 組織が信者の生活のすべてになっている
- 14 . 共同体内部でのみ通用する言葉を多く持っている
- 15 . 組織からの離脱について極度の恐怖心を与える

更に具体的に、ご自分で接する宗教団体がカルトであるかどうかを見分けるためには、以下のような点に注意を払うとよいでしょう。

- 1 . 誘われたグループについて外部からの情報を集める
- 2 . そのグループの特徴を内部からも探る（観察、質問、内部文書等によって）
- 3 . どんな状況においても自分自身を見失わないようにする

破壊的カルトのイデオロギー （文献 1 1 , 43 -44 頁）

- 1 . 教祖への服従
- 2 . 世界観の分極化
- 3 . 思考より感情
- 4 . 感情の支配
- 5 . 批判的思考を汚辱とする
- 6 . 救済・充足・自己認識はただ教団に従うことによるのみ得られる
- 7 . 目的のためならどんな手段を用いても正当化される
- 8 . 教団を個人より優先する
- 9 . 秘密主義と精鋭主義を掲げていて、入信にはある決まった儀式がある
- 10 . 脱会者には、過酷で超自然的現象の制裁が下されると警告する
- 11 . 過去との断絶 家族、友人、自分の目標や関心といったものを断ち切る
- 12 . 教団の教義は絶対的な真実で、一般社会の法律を超越したものとする
- 13 . 信者に特別な力と特権を与える